

## ルサ・相泊地区におけるエゾシカ密度操作実験に適用するシカ捕獲手法の試案

### ○今冬の捕獲について

ルサ・相泊地区では、密度操作実験の試行として、様々な捕獲手法を実施し、効率性、コスト、課題等を検討することとしている。平成 22 年（2010 年）春期に実施したシャープシューティングの手法（以下 SS）では、シカが多く集まり過ぎて撃てない、効率的な捕獲が実施できないなどの課題があった。

#### ➤ 目的

- ・ 専門家の提言に基づき改良した SS を実施し、その効率やコスト、課題等を検証する。また、長期間 SS による捕獲を実施することにより、捕獲頭数をどの程度積み上げられるか検証する。
- ・ 囲いワナによる捕獲を実施し、立地や希少猛禽類の生息等の条件を踏まえた効率やコスト、課題等を検証する。また、SS と同時に実施することにより、囲いワナによる捕獲の実施が、当該地域の群れを SS に適した個体数（2～3 頭程度）にすることに寄与するか検証する。
- ・ 上記および道路からの流し猟案を検討し、当該地区に適した捕獲手法を検討する。

#### ➤ 手法とスケジュール

- ・ 11～12 月から 3 月まで、ルサ川右岸 2 地点における SS を実施するとともに、ルサ川左岸において囲いワナによる捕獲を実施する。
- ・ 道路からの流し猟は関係機関等の合意が得られた場合、1～2 回程度試行的に実施する。発砲が難しい場合には餌付けなどのみ実施し、データを収集する。

### ○具体的な捕獲手法

ルサ・相泊地区では、平成 22 年（2010 年）3 月～4 月に SS を試行した。その際の結果や課題を踏まえた上で、海外から 2 名のシカ管理専門家を招聘し、知床における SS の試行地および候補地の視察と意見交換を同 7 月におこなった。その際に得られた助言を取り入れて、1) ルサ地区での SS の改良案と、3) ルサ・相泊間道道からの流し猟案を下記に示した。加えて、銃を使用しない捕獲手法として、2) 囲いワナによる生体捕獲案も、ルサ地区における新たな捕獲手法として提案している。

なお、上記の海外シカ管理専門家招聘の結果については、資料 2-2 に詳細を示した。

#### 1. 専門家の提言にもとづくルサ FH 裏での SS 改良案

平成 22 年（2010 年）春期の SS 試行時からの改良・変更点は以下のとおり

○積雪期にはシカが集まりすぎる傾向があったため、今シーズンは積雪前である 11～12 月

の捕獲作業開始を目指し、あらかじめ所定の2ヵ所で餌付けを行う。また昨シーズン同様、1～3月の積雪期にも実施する。

○餌付け作業は、射手と同じ服装をした人間が、ほぼ毎日同じ時間帯に同じ方式（運搬方法や餌の撒き方など）で実施し、一度に大量の餌を置くことは避ける。

○ルサフィールドハウス裏で実施するが、餌場2ヵ所のうち1ヵ所（上流側）の位置を変更する。また射手と爆音機の位置をそれぞれの餌場から距離40mの位置に変更する。

○射手は基本的に1名とし、記録係が1名付く。また、両名とも餌付け作業と同じ服装とする。

○餌を運ぶ車と同じピックアップトラックの荷台に射手と記録係が乗って、運転席位置の天井にコンパネ製の射撃台を設置し、その上にバイポッドを乗せて狙撃する（図1）。積雪期には、爆音器脇まで除雪を行い、ピックアップトラックを乗り付けることが可能な状態として、積雪期前と状況を変えないようにして射撃を行う。



図1. ピックアップトラックを利用した狙撃のイメージ図.

○狙撃後の死体はすぐに回収し、流れた血で周囲が汚れることを防ぎ、血が付着した雪なども回収、除去する。

○同じ餌場での捕獲作業は間隔をあけて週2回程度とし、2日連続の捕獲は行わない。

○シカが餌場にたくさん集まりすぎる場合には、餌は少量ずつ間隔を開けて横一列に置き、射手から見た時にシカが重ならず左右に分散するように誘導する。

○シカの餌場への集合状況のモニタリングについても適宜実施し、日中の集合数に変化が認められた場合は、夜間の状況も確認する。

○捕獲にあたっては、捕獲間隔の違い、爆音器が作動している状況と作動無しでの違いなど、条件を変えられる要素に関しては、変えた場合と変えない場合それぞれに関して、シカの反応の違いを比較できるように努める。

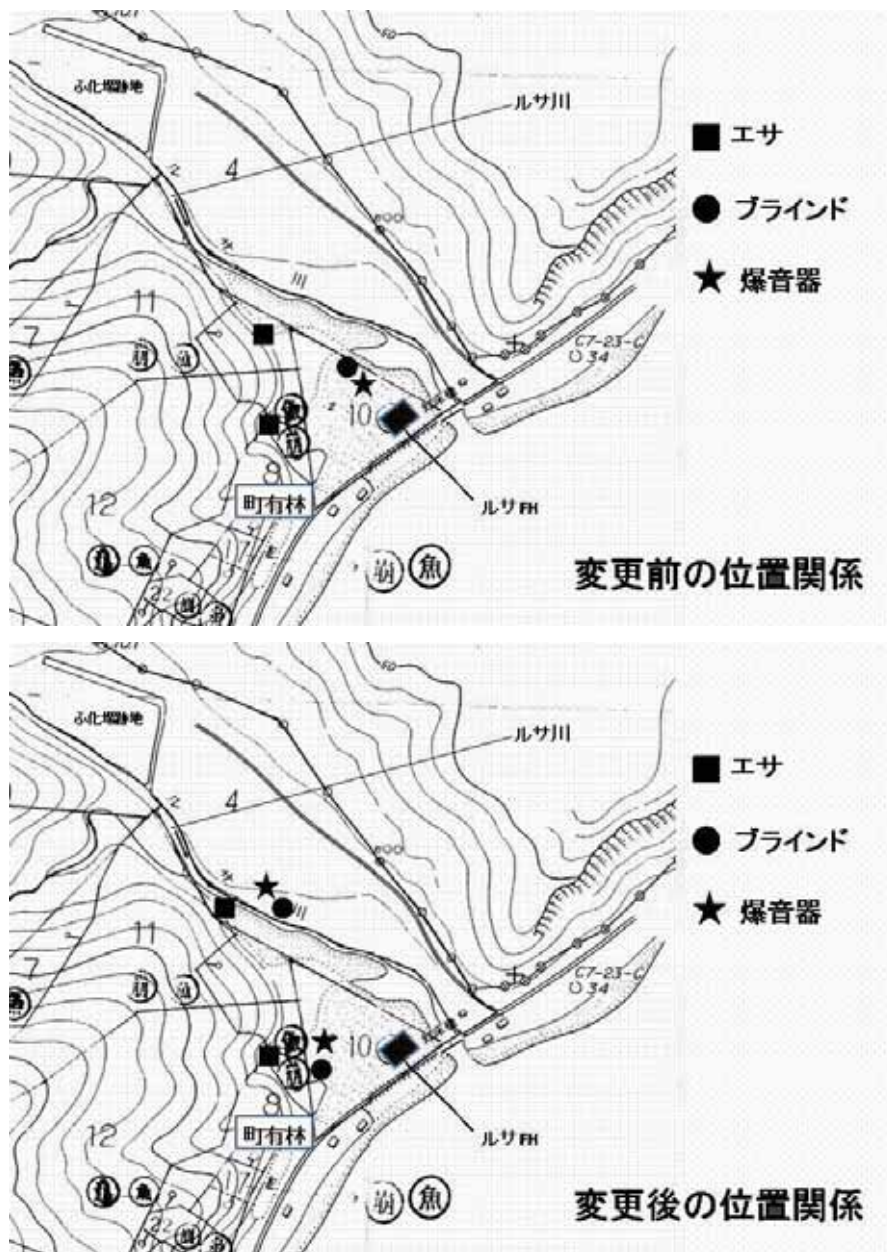


図2. 平成22年春期(2010年4月)試行時の餌場と射手の位置関係(上)と、専門家のアドバイスをを受けて変更した餌場と射手の位置関係(下)

## 2. ルサ左岸孵化場跡地における囲いワナによる生体捕獲

- SS 捕獲現場から少し離れた位置に囲いワナを設置し、大量捕獲を試みる。
- 希少猛禽への影響を避けるために、日没時間 30 分前までに全作業を終了し、日の出時間までは囲いワナ付近に作業員は近づかないように徹底する。
- 夜間については監視カメラとライトを設置し、離れた地点から囲いワナ内のシカの状況がわかるようにする。
- ワナを閉めきるための扉については、全て電動扉とし、作業員がワナに近づかなくても扉を閉鎖出来る構造とする。
- 捕獲した個体については有効利用を検討する。
- ワナの内部面積は 500 m<sup>2</sup>程度以上とし、ワナを閉鎖した際に捕獲されたシカがパニックを起こしてワナの内部壁に突進しない面積を確保する。
- 道道から孵化場跡地までの砂利道約 400m 区間の除雪が必要となる。
- シカが餌に餌付くまでの期間や、餌に来る期間別や時間帯別の頭数、イヤタグが装着された個体を観察して、餌に来る頻度など捕獲に必要なデータを把握するよう努める。

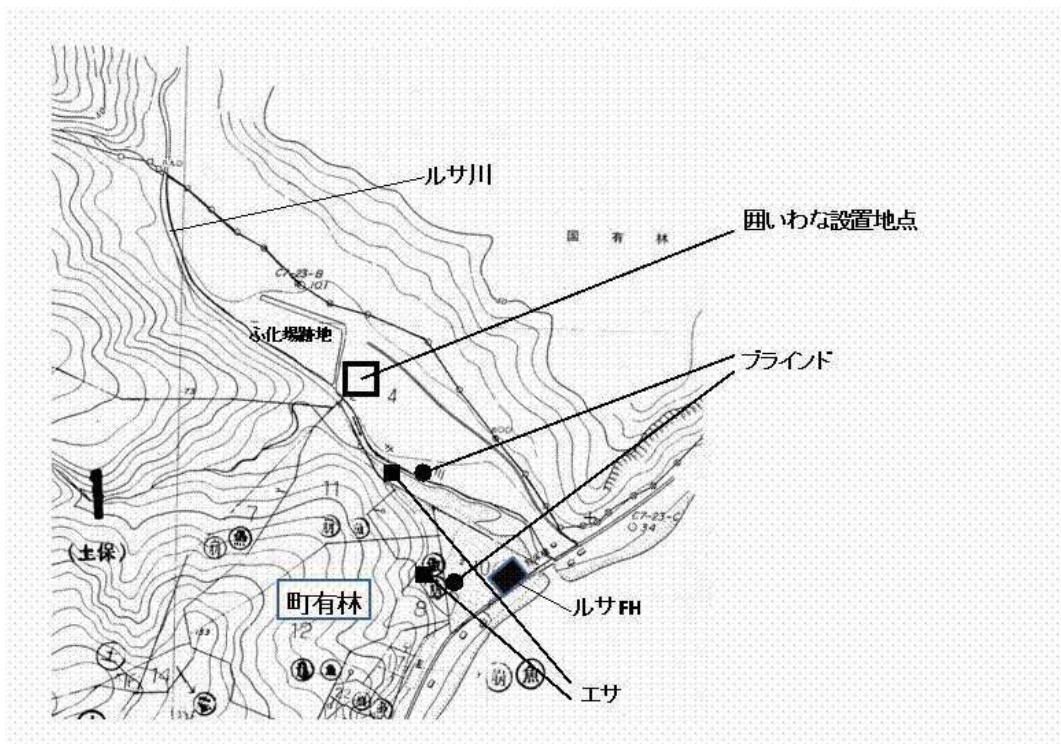


図 3. ルサ川河口付近における SS 捕獲地点と囲いワナ設置地点との位置関係.

### 3. ルサ～相泊間の道道上における流し猟

○ルサ～相泊間の道道 8 km 区間を車両で往復し、斜面に出てきたシカを狙撃する。

○少数群のみを発砲対象とし、スマートディア化を防ぐ。

○路上からの発砲となるため、道路管理者（北海道の建設管理部）や警察と協議の上、一般車両通行禁止などの措置が必要。ただし、上記区間においては冬期でも雪崩防止柵工事などで作業関係車両の出入りが非常に多い。

○例年 2 月には斜面の積雪が多いため、道道から狙撃可能な位置までシカが下りてこない。2 月以外の時期についても、本地区のシカは午前中にはほとんど斜面に姿を現さないことに留意し、原則午後には捕獲を実施する。

○捕獲に使用する車両については、SS と同様の装備を施したピックアップトラックとし、これも同様に射手 1 名と記録係 1 名が荷台に乗車し、運転手を含めた 3 名を捕獲担当チームとする。

○道路沿いに複数箇所の餌場を設け、車で餌場を巡回しつつ捕獲に適した餌場のみで捕獲を実施する。餌場には一度に大量の餌は置かない。

○餌場の間隔は、地形や樹木を利用して、餌場にきたシカが隣接する餌場のシカを目視できないように配置する。

○捕獲したシカの回収は、捕獲車から少し離れて別の回収トラックで行い、捕獲個体が長時間放置されないようにし、SS と同様血のついた雪なども回収、除去する。

○路上からの発砲は一般には禁止されており、安全管理対策を講じたうえで関係機関の許可をとる必要がある。当該地区で特例的に許可が得られるようであれば実施するが、仮に得られない場合でも、餌場の設置をし、餌付くまでの日数や餌場に来る頭数、餌付いた個体の警戒心の程度などを確認する。



図4. ルサ相泊地区の全体図.AはSS実施地点、Bは囲いワナ設置地点を示す。

### ○希少猛禽類のモニタリング手法

○ルサ・相泊地区には、希少猛禽類が生息および繁殖していることから、当該地区でSSや囲いワナでの捕獲を実施する場合には、実施することの影響を把握するために、希少猛禽類のモニタリングを実施する必要がある。

○モニタリング方法は、囲いワナとSSによる捕獲実施前、捕獲実施期間において、それぞれ目視により生息個体の行動観察を数日間行い、捕獲を実施する前と捕獲実施期間において、当該希少猛禽類の行動の違いが生じるかどうかを確認する。また、違いが生じた場合には、どういう違いがどの程度の期間続いたかについても把握する。

○あわせて河川沿いにおける足跡等の痕跡調査を実施する。